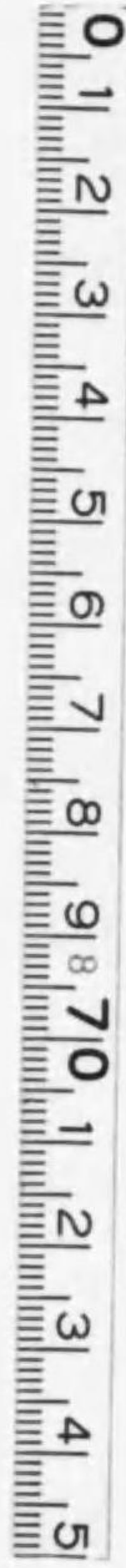


特261
351

227
48

和漢朗詠集抄



始



特 261
351

傳 蘇 原 行 成 書

三来雪の風折新梅煖氷消冷洗意言帳

庭増葉を晴はゆ緑林言三都を言ね

もやいそよそひのうこのまわらぬれ七

ふつうはくはよまゆあふけくくれ

社らま海目や葉持あ新梅是ま風口

野ま芳菲紅錦地好お疎花装つて

はくまをまれあ

わ、よ人のまよ

新梅 庭雪

別名

とみ文藝のそとに今書核のほかに
るまふの愛城団花の風を人

されともなうらわさるは

のうらわさるは

是のうらわさるは水面を若風洗沈

のうらわさるは水面を若風洗沈

あらしのうらわさるは

またうらわさるは

夜光眼は取れ火字と書来嫩似烟

白

鏡沙草只三系許許栲露後半為録

著

はささほみさささわい法こみすの

ぶの〜かににゆきさはあちつ

あちひをれみ村のしらゆ〜むら

ら〜ちらあのいみは、やたさよんり

長示鐘花外あ就池柳分西中涼

李橋

善得白るを父母洗来二う一取業君志

記

さくらふわあめはあめよわたり
はわらえんさぬのけいふれむ
あきあまのらふふくさるめ
いふてわらうたわらうらみりせ

梅志第雪花垂上柳色初綻入酒中
三幸春標

漱産臘雪新村裏封依院喜風未扇光
村と
山巻

いふてわらうたわらうらみりせ

比わよのむめはれをよにせり
あへ産産

たふのうらにうこさるゝがうちりし
みまゝにしてむむみわんぶのうあ縄丸
とよはれつあられたうそもわねも
いれつうまのさまうちうれ書

うはれしう。みれひうけい。けみうい
とやちうしんやまわしれもれ 原見かき

わるやぶのわつねうあまのひんうら
りれいんたうのうらう 魚

山見新園詠水際新吟古業物源新後

池谷水世々三徳友松高風多一拜一秋英明

ふつ、けのいそぬのうつさむすむつ

なほさよよとて心木もゆなううのれ

さあけつあまよまあかのららゆと
ア、あらはむむとむとむと

さあけつあまよまあかのららゆと
なほさよよとて心木もゆなううのれ

系原新鏡苗初月志井赤の故入蒼凡
 煇母翠扇清風曉水冷碧石白落林
 さらさらさらはのよるわにわにわに
 たりたりはるゆをたよとあちさく

上代様書道學習要訣

古來唐様をのみ模倣せし我國の書は、平安朝に入りて他の美術工藝と共に漸次國風に渾化せられて茲に所謂和様の書體を生じ、其間更に假名の一體を成し、愈國民性の美を發揮せり。これ即ち上代様なり。然るに鎌倉時代以降漸く流派の定型に捉はれ、筆路熟達すれども氣品之に伴はず、遂に全く振はざるに至れり。されば此の弊を救はむには古名跡の最も優秀なるものにつきて學習すべきなり。

凡書體肥に過ぐれば俗となり易く瘦なれば枯燥し易し。流滯すれば意屈し、走筆なれば勢を得るに易けれども、體速しくして書品劣るべし。上代様の妙は秀潤にして道勁、殊に假名の如きは遊絲連綿の美を尙び、體瘦なるもの多けれども枯燥せず、風神高逸優雅の趣を得るにあり。

上代様の書の今に存せるものを察するに書體必ずしも一様ならず。老蒼なるあり、流麗なるあり。或は整齊し、或は奔騰し、各風姿を異にしてその特色を發揮せり。然れどもその高雅優秀にして神韻飄渺たるに至りては、則ち一なり。故に今その最も習ひ易く入り易きものとして伊豫本和漢朗詠集中より抄出したなり。

執筆 執筆の法、人によりて各長所を異にし、一概に論じ難しといへども、上代様殊に假名には最も指端の活動を要するものなれば、單鉤を主とすべきが如し。また必ずしも懸腕直筆の説に拘泥するを要せず。

練習 臨書の大きさは適宜なれども、初學者の者には歌一首を半紙一枚位に適度に習はしめ、漸次精熟するに従ひて臨本と同大にして文字の配列を種々に變化せしむれば更に妙なるべし。又時々パラピン紙を用る臨本の上よりそのまゝ摹書せしむるも結構使轉を會得せしむるに便ならむ。

筆紙墨につきて特に注意すべき事項左の如し。
筆 凡筆は紙質によりて大に影響するものなれど、上代樓の書には毛穎の勁剛なるものは枯燥して韻致に乏しく、柔軟に過ぐれば滲濁に陥るべく筆毫は鋒稍長くして捌にあらざるを可とすべし。

書寫の前には毎次筆尖を水に潤し置き、書寫の後には必ず筆尖を損せざる様、少許の水を濕し軽く紙上に引くやうにして拭ふべし。特に假名の妙を顯すは筆端毫厘の際に在るを以て最も鋒穎を大切にすべきなり。

紙 畫仙紙の如く質軟くして墨汁を吸収し易きもの、又美濃紙の如く墨を弾き易きものは概して不可なり。質堅緻なるものを可とし、鳥の子を最とす。半紙又は洋紙中にも適當なるものあるべし。

墨 宿墨及坊間售ぐところの墨汁の如き筆端を膠着せしむるものは殊に假名に於て最避くべきものなるべし。墨を磨るには毎次所要の墨を充たすに止むべし。なほ靦は時々これを洗ひて墨滓の凝固せざる様心懸くべし。

柳無氣力條先動。池有波文水盡開。今日不知誰計會。春風春水一時來。
袖ひちてむすびし水の氷れるを春立けふの風やまくらむ
氣霧風梳新柳髮。氷消浪洗舊苔盤。庭增氣色晴沙綠。林變容輝宿雪紅。
岩そぐたるひのうへの早蕨のもえ出づる春に成りにけるかな
花下忘歸因美景。樽前勸醉足春風。野草芳菲紅錦地。遊絲綠線碧羅天。
春は猶我にて知りぬ花さかり心のどけき人はあらじな
若使韶光知我意。今宵旅宿在詩家。留春不用關城固。花落隨風鳥入雲。
花もみならりぬる宿はゆく春の古郷そこそ成りぬべらなれ
臺頭有酒雲呼客。水面無塵風洗池。鶯聲誘引來花下。草色拘留坐水邊。
あら玉の年立かへるあしたより待る。ものは雲の聲

霞光曙後殷於火。草色晴來嫩似煙。鑽沙草只三分許。跨樹霞纒半段餘。
春霞たてるやいづこみよしの、吉野の山に雪はふりつ、
朝日さす峰の白雪むらさきて春の霞ははやたちにけり
長樂鐘聲花外盡。龍池柳色雨中深。養得自爲花父母。洗來寧辨藥君臣。
櫻がり雨はふりきぬ同じくばぬるこも花のかげに隠れむ
青柳の枝にかゝれる春雨は糸もてぬける玉かみぞ見る
梅花帶雪飛琴上。柳色和煙入酒中。漸薰蠟雪新封裏。偷綻春風未扇先。
いにし年根こして植ゑし我宿の若樹の梅は花咲きにけり
香をこめて誰折らざらむ梅の花あやなし霞たちな隠しそ
君ならで誰にか見せん梅の花色をも香をも知る人ぞしる

稽宅迎晴庭月暗。陸池逐日水煙深。潭心月泛交枝桂。岸口風來混葉霜。
 青柳の糸よりかくる春しもぞみだれて花は綻びにける
 青柳の蔭にこもれる糸なれば春のくるにぞ色まさりける
 我宿の花見がてらに來る人は散りなん後ぞ戀しかるべき
 見てのみや人に語らん山櫻手ごまに折りて家づみにせん
 櫻ちる木の下風は寒からて空に知られぬ雪ぞ降りける
 田子の浦に底さへ匂ふ藤浪をかざして行かん見ぬ人のため
 常盤なる松のなたてにあやなくもかゝれる藤の咲きて散るかな
 かはづなく神無備川に影見えて今や散るらん山吹の花
 我宿の八重山吹のひさへだに散り殘らなん春のかたみに

背燈殘經宿烟。開箱衣帶隔年香。生衣欲待家人着。宿釀當招邑老醜。
 花の色に染めし袖のをしければ衣かへうきけふにもあるかな
 風吹枯木晴天雨。月照平沙夏夜霜。風生竹夜窓間臥。月照松時臺上行。
 夏の夜をねぬに明ぬこいひおきし人は物をや思はざりけん
 臥見新圖臨水障。行吟古集納涼詩。池冷水無三伏夏。松高風有一聲秋。
 松かげの岩井の水をむすびつゝ、夏なき年ぞ思ひけるかな
 夏はつるあふぎみ秋の白露こいつれか先はおかむすらん
 さつきまつ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする
 葉展影纏當朔月。花開香散入簾風。煙開翠扇清風曉。水泛紅衣白露秋。
 はらす葉の濁にそまぬ心もてなどかは露を玉さあざむく

昭和五年三月二十五日印刷
 昭和五年三月二十八日發行

不許
 複製

編輯者 京都市野野町一〇七 旭 巖
 加藤 藤
 發行者 古梅園京都支店
 高橋 尙 藏
 印刷所 京都市河原町通御橋北入
 黒山 眞 製 版 所
 電話本局五六一六番

發行所

京都市寺町通二條上
 株式會社 古梅園京都支店
 電話上 一五三二番
 電話〇 送東京七四七三番
 電話〇 送大阪六四二六七番

終

